

日本南アジア学会第31回全国大会に参加

堀内みどり

標記大会が、金沢歌劇座（多目的ホール、2007年に金沢市観光会館から改称）会議棟を会場として、9月29日・30日に開催された（大会事務局は金沢大学）。交通の便もよく、周囲には金沢の観光スポットのほか、鈴木大拙館や21世紀美術館などがあった。今年は日本南アジア学会設立30周年ということで、全国大会だけでなく、各地で記念連続シンポジウムが企画・開催されてきた。本大会での30周年記念連続シンポジウムは、「ヒンドウイズム再考：前近代インド社会における宗教的混淆」に焦点を当て、4つの発題が行われた。

大会は、自由論題セッション10、日本語テーマ別セッション1、英語テーマ別セッション4で、40を超える発表があった。

大会は台風24号が北陸に接近する中、予定通り始まったが、2日目は「可能な範囲での開催」となり、午後に予定されていた大会シンポジウムは開始時間を早めて行われた。

環境NPOとの共催事業：「20周年記念講演会」の開催

佐藤孝則

2018年10月5日、天理市民会館でNPO法人環境市民ネットワーク天理主催による標記「講演会」が開催された。この「講演会」は、おやさと研究所が共催団体の一つとして加わる「天理環境フォーラム2018」の関連事業として開催されたもので、この「フォーラム2018」の実行委員長は筆者が務めている。

「講演会」のテーマは「里山資本を活かした地域づくり」で、天理市内の里山資本、すなわち“地域の宝物・大切なもの”を活かした、地域づくり・人づくりをどのように進めていけばいいのか、というテーマである。開催趣旨を以下に記す。

環境市民ネットワーク天理は、1997年12月の発足から、満20年を迎えました。ちょうど「地球温暖化防止京都会議（COP3）」が開催された時期で、市民団体と事業者、行政が協働で取り組む環境NGOとしてスタートしました。その後2010年9月には環境NPOとして法人格を取得し、今日に至っています。

今回、発足20周年記念企画として、河瀬直美監督に「里山資本を活かした地域づくり」のテーマで、60分程ご講演していただくことになりました。その後で、天理市長の並河健氏、合同会社ほうせき箱代表社員の平井宗助氏からそれぞれ10分ほどお話ししていただき、河瀬監督も加わった鼎談をおこないます。

この趣旨に基づいて、記念講演と鼎談がおこなわれ、鼎談では、筆者が進行役を務めた。

講演会では、河瀬氏は最初に「里山」のイメージを紹介し、フランスで上映した作品『Between Paris & Nara』の奈良の撮影場所を石上神宮に選んだ理由は、里山で暮らすことの重要性和その姿がそこにあったからだと言った（写真1）。また、作品『光』では、龍王山からの夕陽を撮影場所にするなど、「撮影には“場”が必要だ」とし、その“場”が奈良にはたくさんあると述べた。そして、奈良県内を映画制作のロケ地を選ぶ“こだわり”

はそこにあるとも述べた。

また、天理市内に田んぼを3枚持ち、田植えから稲刈りまでの一連の作業を以前から手掛けており、7年前からは畑作業を土づくり



写真1「記念講演」の河瀬直美監督。

から始めたことも紹介した。まさに「里山」での暮らしを実践し、人と自然のあり方、心の通わせ方、神様への感謝の気持ちなど、目には見えない「里山資本」を活かした生き方についての体験が紹介された。

鼎談では、河瀬氏の講演を受け、パネリスト3名による議論が交わされた（写真2）。鼎談時間は予定の3分の1ほどしか取れなかったが、パネリストの笑顔は始終絶えることはなかった。



写真2「鼎談」のようす。写真右から、平井氏、並河氏、河瀬氏、そして筆者。

議論の中では、「発酵」が話題となった。きっかけは、平井氏による「柿の葉寿司は酢を使わずに発酵させてつくる」、その「柿の葉による発酵・抗菌という目に見えない作用に対する恐れ」は、「神仏に対する畏敬の念と重なって見えたのではないか」、という話から始まった。これは、河瀬氏の石上神宮の「里山」イメージとも連動する内容だった。

さらに、並河氏の「発酵には旨味がある」、「発酵や化学式を特に知らなくても……」との意見が出てくると、河瀬氏からは「発酵は、化学式ではない」という言葉が出た。これは、平井氏が述べていた「必ずしも1+1=2ではない」という考え方と同じで、発酵品はさまざまな発酵条件によって異なる製品に仕上がるように、単純な化学反応で同じ製品ができるものではない、という意味で述べたものである。これは、発酵製品は東洋的視点の食品であることを示唆する考え方である。

この講演会と鼎談に参加した人は304名で、そのうち天理大学生は40名ほどだった。また、会場では実行委員の関係者だけでなく、天理大学「エコサークル」や、天理高校「理研部」のメンバーなど、高校生や大学生たちも、受付、会場案内、駐車場整備など、さまざまな場所で、裏方として活躍してくれた。まさに、「一手一つ」でおこなわれた企画だった。

最後に、竹の鉢植えを舞台に設営していただいた天理教管轄部造園課、天理駅前「西1駐車場」をご用意いただいた天理教輸送部に対し、幸甚なる謝意を表したい。（文責は筆者）